
現実

カナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実

【Nコード】

N1921E

【作者名】

カナイ

【あらすじ】

「ねえ、私たちのいるこの世界は本当の本当に現実なのかしら」
彼女がこう言ったのはある日の昼下がり。私の家のリビングで、彼女と、もう一人の友人と三人でお茶を飲んでいるときだった。……
私たちは本当に現実に在るのでしょうか。

「ねえ、私たちのいるこの世界は本当の本当に現実なのかしら」

彼女がこう言ったのはある日の昼下がり。私の家のリビングで、彼女と、もう一人の友人と三人でお茶を飲んでいるときだった。

「何のこと？」

もう一人の友人が聞いた。彼女の言葉はそれまでの話の流れとは全く関係のなさそうな話だった。

彼女はティーカップを傾けて、また元の位置に戻した。

「今、ここでお茶を飲んでいる私は本当に存在している人間なのかどうか、ってことよ」

「訳がわからない」

私は呟いて、もう一人の友人と顔を見合わせた。お互いに彼女が言っていることの意味が分かっているかどうかを目で問っている。彼女は自分で作って持ってきたキャロットムースをスプーンですくいながら呟いた。

「そんな感じの本なのよ」

彼女はムースを口に含んだ。

私たちはやっと彼女が何を言っているのかが分かった。……気がした。

彼女は本をよく読む。私も読むけど、彼女の本へかける時間数は半端ではない。一冊の本を何度も何度も読み返し、内容について考え、飽きるまですつと思案を続ける。そして彼女は時折私たちに謎かけのように質問をする。

「どんな話なの？」

私が問うと、彼女は本の内容を語りだした。

その小説の主人公は小説家で、その小説は彼女が書く物語で進んでいく。

彼女の小説は必ず一人は人が死ぬ。

ある日彼女はその寸前に自分が書き上げた小説の主人公と同じ病気にかかっていて、もう助からないということを知る。

そして彼女は真っ白なノートに言葉をつづり始める。

彼女の、本当に最後の物語として。

その物語は最後にこうくくられる。

『私は今まで、実に多くの物語の登場人物たちの運命を操ってきた。しかし、どうやら私もまた、物語の中で誰かに運命を操られる一人でしかなかったようだ』

そこでその小説は終わる

彼女は説明を終えると、少しの間をおいた。

そして、再び口を開いた。

「その小説のあとがきにね、作者はこう書いているの。

『私もいつか、私の世界の物語の綴り手の創る運命によって、一生を終えるでしょう』」

つて。ねえ、私たちは本当に現実に存在しているかしら？それとも、誰かの作った物語の登場人物でしかないのかしら？」

「そんなことは考えてもわかんないよ」

私は少し投げやりに答えた。

対して、もう一人の友人は少し考えてから、話し出した。

「どちらでも同じだと思う。たとえ、私たちが誰かの創った物語の一部でも、そうでなくても、此処が私たちにとつての現実だよ」

それっきり、私たちは二人の帰る時間までそれぞれの思考に沈んでいた。

二人が帰る時間になり、私は二人を玄関まで送っていった。

二人が靴を履くのを見ながら、口を開いた。

「さっきの話……」

二人が私のほうへ向いた。

私は少し照れながらも続けた。

「私も、私たちにとつての現実はこちらなんだから、それでいいんじゃないかと思う。」

たとえば誰かが決めてる運命でもさ、私たちにはその未来は分からないわけでしょ？

だったら、それでいいよ。

それはまだ、運命が決まってるじゃないのと同じだもん」

「なるほど。ご意見をどうもありがとう」

この話題の始まりである彼女は微笑みながら玄関の戸をあけた。二人を見送って、私は扉を閉めた。

「ふう」

私はキーボードから手を離してパソコンの画面を見直した。そこには私の作り出した三人の登場人物の紡ぐ物語がある。それを見ながら私は考える。

（さて、私は物語の書き手だ。だけれど、もしかしたら私もまた、誰かに作り出された登場人物に過ぎないのかもしれない）

そんな、考え出すときの無いことを考えながら、私は文書を保存した。

そしてパソコンの電源を切った。

（後書き）

この小説は宇宙について考えていた時のものなんです。

「終わりが無い」と言われている宇宙ですが、それっておかしいですよ。万物には終わりがあるはず。どこまでも広がっても最終的にはどこかで終わっているはず。でもその辺は理論とかでは説明できていたとしても、実際のところはどうか、宇宙で生きている私たちにもわかりません。

その辺が物語の設定外みたいだな、と思ったんです。

私たち人間や、他の動物、地球、太陽、月、その他の星、そういったものを描いた何らかの物語に、宇宙の終わりについての設定はいらなかったのではないのでしょうか。

私の書いた『現実』も、三人の登場人物は「私」の家のリビングでお茶をしています。どんなテーブルなのか、とかそういうことは一切決めていません。イメージとしてはこんな感じ、というものはありますが、別に机がガラスだろうと、木だろうと、そんなことはどうでもいいんです。ただ、彼女たちがそこにいて話している。そのことが書きたかったのです。

だから、家から出た二人も、それを見送った「私」も、次の瞬間には掻き消えてなくなってしまう。そこから次の時間は彼女たちにはありません。

宇宙もそんな感じで、私たちはある大きな物語に登場するものの一つに過ぎないのかもしれない。

そんなことを考えながら書きました。

小説、あとがき、ともに自分のHPにアップしているものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1921e/>

現実

2011年1月16日01時08分発行